

熱い砂の要求

# 第1話

夏の陽射しがまぶしく輝く。陽太は海岸線を歩いていた。

砂が彼の足に熱く纏わり付いては、指の間をサラサラと解けていった。砂は彼の足の下で心地よくさらさらと音を立てる。波の音と風の匂いが彼の心を穏やかに包み込んでいった。

波と風の匂いを楽しんでいると、遠くで一人の男が海辺に立っているのが目に入った。

彼は髪を風になびかせ、眩しい笑顔を浮かべている。陽太はその男に引かれるように近づく。男は陽太の存在に気づき、彼に微笑んで声をかけた。

「素敵な海ですね。ここで涼んでいるんですか？」と男が陽太に尋ねた。

陽太も微笑みながら答える。

「ええ、ちょっと散歩がてらに来てみたんですが...。海の風が気持ちいいですね」

二人の視線は交錯し、海の青さと太陽の輝きが彼らを包み込む。彼らの会話は、風や波のようにごく自然に始まった。

「夏って、何か新しいことを始めたくありませんか？」

男は白波を立てる海を見つめ、さらに続ける。

「私はこの夏、ここで心を休めようと思ってやってきました」

陽太は彼の言葉に共感し、微笑みながら応える。

「...夏は新たな一步を踏み出す良い季節ですよ。あなたのおっしゃる通り、ここは心を休めるのにいい場所ですよ」

会話は自然で、まるで互いの心が既に通じ合っているかのようだった。海の波がゆっくりと岸辺に押し寄せる音が、彼らの言葉を包み込む。この出会いが、運命を変えることを彼らはまだ知らない。

しかし、確かにこの瞬間から、二人の間に小さな熱を持ち始め、火花が舞い上がったのだ。



## 第2話

\* \* \*

夏の日差しまばゆく、陽太は海辺を歩いていた。彼は、その夏だけ涼みにやってきた一人の男と出会う。その男の目は瞳に海を映し、波のように青く澄んでいた。

翌日、またその翌日も二人はそれぞれ別々に海辺にやってきた。

陽太は心の中で、

———昨日出会ったあの男性に再び会いたい。と思っていた。そうして、男が現れた瞬間、陽太の心は高鳴った。

———初めはただの偶然の出会いだったはずなのに  
…。

陽太は男に引かれていく自分を感じた。そして男もまた、陽太の存在に心を揺さぶられているようだった。

言葉では表せない気持ちだが、微かに二人の心に触れるように交わる。

男は言った。

「私は1か月ほどここに滞在する予定です」

彼らが話し始めると、互いの心に何かを共有するような感覚が生まれた。

彼らの会話と距離は、時間が経つにつれてますます深くなっていく。

男もまた、陽太に会いたいと思っていたのか、彼も出会ってから毎日海辺に姿を現した。

二人の目が合った瞬間、微笑みが彼らの唇に浮かぶ。お互いが心地よい静寂の中で、彼らはどちらともなく再び会話を始める。

一週間が過ぎた頃だ。

男は陽太に、

「どうでしょう。今度はうちへ絵を見に来ませんか？実は、私はこの近くの古民家を借りて過ごしているんですが…。有名な作家の絵を集めている古民家で。…どうでしょう？一緒に楽しめると思うのですが…」

と伝える。

陽太は興味津々でうなずいた。

「それは素晴らしいですね。ぜひ見てみたいです。  
...絵にはいろんな物語が込められているから...きっと  
新たな発見ができるはず」  
そうやって嬉しそうに話す陽太に男は唇の端が  
緩む。

数日後、彼らは好きな絵画の話をしながら、古民家  
へ向かった。

「ここです」  
ガラガラと扉を開けて古民家へ入ると、壁に飾られ  
た数々の絵画が陽太の目に飛び込んできた。その中  
でも、一つの絵が陽太の目を引いた。  
「これ...は」

男は絵画に夢中の陽太に語りかける。  
「この絵は有名な作家の作品で、船がボトルの中に  
収められているんです。...見たことはありませ  
るか？」

男は微笑みながら続けた。  
「この絵は、自分の中に秘めた願望や夢が詰まっ  
ているような気がするんです。船は未知の世界への冒  
険を象徴しているのかもしれませんが」

絵の中にはボトルが描かれており、ボトルの中には  
船が浮かんでいる様子が描かれていた。

「立体的でしょう。触れてみてもいいですよ」

陽太は絵の中のボトルに手を伸ばし、指先で表面をなぞるように絵の中のボトルの表面に触れた。すると、偶然か男の手と陽太の手が触れ合った。触れ合った瞬間、指先から熱した砂のように熱く痺れる感覚を、二人は感じた。

彼らの心には強い電流が走ったかのような感覚が広がり、何か深い瞬間を共有したような感覚に包まれた。

———やわらかい。

彼らは言葉を交わすことなく、ただ手を握り締めたまま静かに見つめ合った。指先が触れ合うことで、言葉では言い表せない感情が広がっていく。

手は次第に伸び、男の指が陽太の唇をなぞり、互いの視線が交差する。その触れ合いは、まるで運命の力に導かれた出来事のようにであった。

彼らはお互いの存在を確かめ合うため、深い感情を抱き合った。

「恭二...さん」